KSKQ 第三種郵便物認可KSKQ（サロン・あべの）通巻2917号2000年 3月20日

出会い ふれあい 助け合い

サロン・あべの

VOL.165

楽しいマジック

〈サロン・あべの〉2月の出会い

平成12年2月19日(土)午後1時から〈サロン・あべの〉2月の出会いを開催しました。

2月のパネラーは、大阪市の生涯学習インストラクターとしてマジックの講師をされている岸本秀男氏でした。今回はマジックを見るだけでなくタネ明かしをしながら、参加者にも実際に練習をさせてもらうという形で行われました。

「マジック」の3原則

マジックを始める前にそれを演じる者が知っておくべき言葉として、マジックの世界、特に日本のマジック界で古くから知られる「サーストンの3原則」というものがあります。それは

1．マジックを演じる前に、現象を説明してはならない。
2．同じマジックを二度繰り返してはならない。
3．種をあかしてはならない。

シンプルですが、これはどれも大変重要なことばかりで、共通していることは、マジックの本質である「意外性」をなくすようなことは極力さけよ、ということの具体的かつ実践的なアドバイスです。

少し補足すると、

1．マジックは見ていればわかるので、前もって説明する必要はないということ。
2．一度見せたマジックは現象がわかっているので、二度目はひたすらタネを見破るつもりで見られるので、タネがばれてしまう危険性がある。
3．タネ明かしをしてしまうと今見た、不思議な現象に対する感激や驚きも急激に色あせてしまい、観客へのサービスにならない。

実演

・ポケットティッシュを使った手品。

取り出したティッシュに塩をふりかけるようにしながら、手を上からかぶせていくとティッシュが消えてしまう。

次にティッシュを裂いて手の中へ丸め込み、呪文を唱えてティッシュを取り出すと元の一枚になっている。

一九九一年九月三日第三種郵便物認可（毎日発行）

・ロープを使っての手品

首に巻き付けたロープを一瞬にはずす。というもので、そのタネ技を教えていただきました。

参加者全員にロープが配られ、各自で練習をしました。首絞め状態になる人、やり方は理解しても実技がうまく行かない人、他人には出来るが自分では出来ない人など、お互い教え合い、話し合いながら座が和みました。

その後も引き続き、ロープ手品の実演が披露されました。

・一本のロープをハサミで二本に切り、それを一本にする。

・大中小の長さの違うロープが三本あるが、引き合うとなぜか三本とも同じ長さになる。

・輪に結んだロープにセロテープの輪を通したり、はずしたりする。

休憩の後、トランプを使ったカードマジックの話と実演を見せていただきました。

繰ったカードの中から、好きなカードを一枚取って、そのカード内容を覚えておき、また元のカード群に差し込み、適当に繰って、先に取り出していたそのカードを当てる。というものなどいろいろなカードの扱い方を見せていただきました。

マジックをする悦び

岸本講師は、大正13年生まれで、マジックは40年前から始められました。いろいろなマジックにも懲り、タネ準備の材料を大小そろえて運んでいた時もあったそうですが、今ではタネ材料が簡単なロープを主にしているそうです。これならロープとハサミで楽しめます。トランプも手になじんだ物、使い込んだ物を使用しておられます。

観客に興味を持たせて、意外性の悦びを与えられ、みんなに楽しんでもらえた時は嬉しい、と笑顔と共に語られました

まとめ

参加者に実演を見せた後で、各手品のタネ明かしをしていただきました（この紙面ではマジックの３原則により、タネ明かしはできない）。その後、練習をするという形で進んでゆきましたが、マジックを習得するには、鏡の前で何回も練習をしたり、観客の目線をそらせる演出が大事とのことです。また、演技者の目線も大切で、「絵」になる間合いを考えて「見せること」を観客に確認させるなど、手品の技術だけではなく演技についても話されました。

とにかく講師の年期の入ったマジックと話術で、アッと言う間に時間が過ぎたハサロン・あべのＶ２月の出会いでした。

参加者18名（山村貴司）

岸本秀男さん（右）の指導で　ロープマジックを楽しむ皆さん

ピア・カウンセリングを考える

――ありのままの自分を受け入れ、
生き生きした生活を送るために――

24

伊藤智佳子

私が、＜サロン・あべの＞紙に「ピア・カウンセリングを考える－ありのままの自分を受け入れ、生き生きした生活を送るために－」を掲載させていただくようになって、２年になる。２年間の掲載中に、

①ピア・カウンセリング発生の背景、
②ピア・カウンセリングと「自立生活」運動、
③自立生活センターとピア・カウンセリング、
④ピア・カウンセリング講座の実施状況、
⑤ピア・カウンセリング講座のプログラムの実際、
⑥ピア・カウンセリングの技術、
⑦障害者基本法、障害者基本計画、生活支援事業との関わり、

を整理することを通し、ピア・カウンセリングとは何かについて、私なりに考えてきた。

私の「ピア・カウンセリングを考える－ありのままの自分を受け入れ、生き生きした生活を送るために－」は、今回のＶＯＬ．１６５を最後に、掲載を終える。今回は、「まとめにかえて」、私自身のピア・カウンセリングとの出会い、ピア・カウンセリングが今後どのようになっていけばよいのかについての私の思いなどについて整理したいと思う。

【私とピア・カウンセリングとの出会い】

私がピア・カウンセリングという言葉を知ったのは、今から約10年程前だったと思うが、神奈川県横浜市で行われた「日米障害者交流セミナー」に参加したときだった。しかし、その時には「ピア・カウンセリングというものがあるんだ」という程度で、ピア・カウンセリングという言葉の存在を知っただけで内容については全くわかっていなかった。ピア・カウンセリングの内容を深く知りたいと思ったのは、確かセミナーから一年後の大学４年の卒業を目前に控えた時だった。

私個人の障害について触れさせていただくと、今から22年前の小学校６年生のとき（このように書くと現在の年齢がバレてしまうが・・・）にプールに飛び込み、頚椎４番、５番を折り、以後車いすでの生活を送っている。その後、中学、高校はかなり大変な思いをしながら、普通校へ通い、大学は物理的なバリアの少ないところという点で日本福祉大学に進み、大学院を終了した。

大学４年の卒業目前に、なぜピア・カウンセリングを深く知りたいと思ったかというと、非障害者の多い世界で生きてきて、非障害者世界の中に馴染みたくても馴染ませてもらえないという自分、障害者の世界にもどっぷり浸かれない自分という非障害者

・障害者の「どっちつかず」の自分の心の中の「しんどさ」からなんとか抜け出すというか、自分が自分自身を丸ごと受け止めるための方法はないかと強く思ったことがピア・カウンセリングを深く知りたいと思ったきっかけであり、ピア・カウンセリング受講の直接の動機となっている。一回のピア・カウンセリング講座受講だけでは理解することはできず、大学院に進んでから集中講座を3回ほど、長期講座を1回受講し、自分を自分が丸ごと受け止めるためのトレーニングとして、研究テーマとして、ピア・カウンセリングを追求してきた。

【ピア・カウンセリングが今後どのようになればよいのかについての私の思い】

確かに、障害をもっていると「アサーティブ」に、そして「ストレート」に感情を出すことがなかなかできず、その繰り返しが障害者の内面の自己抑圧につながり、知らないうちに疎外感、無力感を感じるようになる場合が多く、泣いたり、笑ったり、あくびをしたりといったことを通して感情の解放をし、本来もっていたはずの力を取り戻すという障害者のエンパワメントのひとつの方法として、ピア・カウンセリングは有効であるということを、私は実感している。しかし、一方では、ピア・カウンセリングの限界性についても絶えず頭の中に置いておかなければいけないということも感じている。たとえば、「心の病とその障害」をもつ人が自らの命を自らが絶つために高い建物の屋上から飛び降りた結果「心の病とその障害」プラス「肢体障害」をもつことになったという事実がある。彼女／彼が肢体障害をもつ者としてのピア・カウンセリングを行う場合、すべてのピア・カウンセラーが彼女／彼とピア・カウンセリングを行うことができるとは、私は思わない。障害をもつ者同士のピア・カウンセリングは過去の体験で解放し切れなかった感情を解放し、本来自分が持っていたはずの力を再評価することに重点がおかれている。そのため、ピア・カウンセラーはカウンセリーの感情を開かせるよう促すことになる。「心の病とその障害」をもっている人の場合、ピア・カウンセラーが感情を開くように、彼女／彼に促すことが最善の方法なの

表紙が変わりました

こころ　ふれあう
一筆箋
1冊100枚綴　￥150ー

サロン・あべのの運営資金にご協力ください。

かどうかは疑問がある。というのは、ピア・カウンセラーがカウンセリーに感情を開くことを促し、カウンセリーの感情が吐露し始めた場合、カウンセリーの感情が開きったままで「今現在いるところ」に戻ってくることができなくなる可能性もある。「心の病とその障害」プラス「肢体障害」をもつ人へのピア・カウンセリングは、かなり熟練のほんの少数のピア・カウンセラーにしかできないと、私は思っている。

前回のＶＯＬ．１６４で少し触れたが、障害・障害者に関わる「専門職」「専門性」について、本気で考える時期なのではないかと思う。国家資格をもっていれば、あるいは大きな組織・機関に所属していれば自動的に「専門職」と呼ばれる人たちになれるわけではない。逆に国家資格をもっていなくても、大きな組織・機関に所属していなくても、障害をもっているという経験的知見の蓄積が「専門職」「専門性」につながることも多い。ただし、障害をもっている人が障害をもっていることだけで障害をもつ人への支援・援助専門職になれるわけではないことを付け加えたい。

近年、社会福祉基礎構造改革に伴い、高齢者・障害者、その他何らかの支援・援助を必要とする人たちを取り巻く状況がめまぐるしく動いており、その動きの速さになかなかついていけない私がいる。一方で、そのような一連の動きを止めるわけにもいかず、なんとかついていかないといけないと思う私がいる。

社会福祉基礎構造改革の最大の物は、目前に迫った高齢者、障害者の「自立」支援を目指している介護保険であり、その具体化の方法がケアマネジメントであるといわれている。人生の大半を障害をもたずに暮らし、加齢により障害をもった人たちへの自立支援におけるケアマネジメントの中心が本人とその家族の穏やかな余生の保障にあるとするならば、人生の最初から最後まで、あるいは若年時から最後まで障害をもって生きる人たちへの「自立」支援におけるケアマネジメントの中心は彼女／彼らの「生きる力・生活力」を引き出す後押しの援助・支援にあるのではないか。すなわち、障害をもつ本人が自らの人生をセルフ・マネジメントできるように本人のエンパワメントするような支援・援助を可能にできる人が「専門職」「専門性をもつ人」であるといえないか。「障害者には金銭管理はできないのではないか」と言う言葉を「専門職」と言われている人たちから聞くことがあるが、「金銭管理」はトレーニング次第で、あるいは障害をもっていない人たちが考えるのとは異なる方法で可能になる。また、障害をもっていない人たちでも、金銭管理をできずに「カード破産」をしている人たちは多くいる。

ピア・カウンセリング活動を進めるピア・カウンセラーたちが障害をもつ本人が自らの人生をセルフ・マネジメントできるように本人のエンパワメントするような支援者・援助者としての「専門職」「専門性をもつ人」になり得る可能性は多いと思われる。そのためにも、ピア・カウンセリングそのものを障害をもつ本人だけではなく、障害をもっていないさまざまな領域の研究者たちで検討し、ピア・カウンセリングの技術や質を高めること、そしてピア・カウンセラーとピア・カウンセリング以外のカウンセラーたちや大きな組織・機関に所属

するワーカーといわれる人たちとの本当の意味でのパートナーシップを確立させていくことを願ってやまない。

【おわりに】

２年間の掲載中に、

①ピア・カウンセリング発生の背景、

②ピア・カウンセリングと「自立生活」運動、

③自立生活センターとピア・カウンセリング、

④ピア・カウンセリング講座の実施状況、

⑤ピア・カウンセリング講座のプログラムの実際、

⑥ピア・カウンセリングの技術、

⑦障害者基本法、障害者基本計画、生活支援事業との関わり、

を整理し、できるだけ客観的に、ピア・カウンセリングとは何かについて、私なりにまとめたつもりである。とはいうものの、どこまで客観的に整理できたか疑問である。というのは、ピア・カウンセリングは、障害をもつ者同士のピア・サポート活動の中で「障害をもつピア」であることを一番問われるものであると、私は考えており、それゆえ、障害をもつ私が客観的にピア・カウンセリングについて整理しようとすればするほど、「ピア」であり続けることと同時に「ピア」であることから一旦離れ、１枚「フィルター」を通してピア・カウンセリングを見るという作業が必要になると考えているからである。

毎月、原稿を書き、事務局宛てに投函するときには「こんなことを書いて誰かから袋だたきにあったらどうしよう」とか「読者の皆さんからつまらない内容だと思われたらどうしよう」という思いの連続であった。そんな中で、事務局から、私の原稿の内容に対しての意見、感想として「チカちゃんの原稿はおもしろい」と遠くからエールを送ってくださっている方がいることを知らせてもらう機会を得、そういった声に励まされながら原稿を書くことができた。

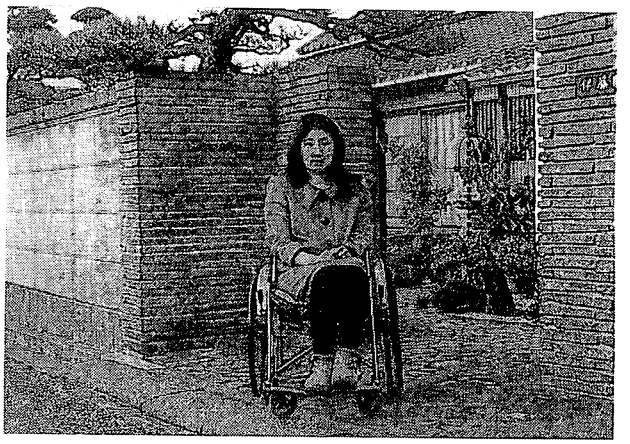
私のピア・カウンセリングについて一考察に対して、さまざまなご批判、異論などをお持ちの方があると思う。もし、可能であれば、そういったご批判、異論などを紙面を通じていただければ幸いである。

また、「ピア」ということから発展して、私は現在「女性障害者の抱かえる特有の課題」について追求している最中である。女性障害者には「女性」であり、「障害者」であるという二重の差別が存在するといわれてきたし、それを実感しているが、二重の差別が何なのか、それを作り出す社会構造は何なのか、それを解決するためにはどうしたらよいのか、が客観的に明らかにされていない。フェミニズムや女性学のような女性問題を扱う分野でも女性障害者は、「女性」に含まれていない気がするし、障害者問題を扱う障害者福祉でも性差を問わず、「障害者一般」で括られており、どちらの分野でも女性障害者は中心課題として取り上げられてこなかったような気がしている。「何とかしなくては」と勝手に思い「女性障害者問題」の実態を明らかにしたいと考え、追求している最中であるが、一人の力でやれることは本当に少なく、限界があることを感じている。もし、女性障害者問題があることをなんとなく日常生活で感じながらも、「まぁ、仕方ないか」と思ってきた人で、なんとなく一緒に考えてみ

ようと思う人たちがいれば、手紙やメールで声を出していただければ幸いである。住所とメールアドレスは、この紙面に載せるのはちょっと怖い気もするので、事務局の方に問い合わせていただければ幸いである。

最後に、＜サロン・あべの＞紙に原稿を掲載していただく機会を与えてくださった上智大学・岡知史先生に、この場を借りてお礼を申し上げる。そして、情報処理機能を使いこなせていない私の横打ちのワープロ原稿を毎月立て打ちに打ち直してくださった冨田慶子さん、さらに、２年間の私の拙い文章にお付合いくださった読者の皆さん、「チカちゃんの原稿はおもしろい」と遠くからエールを送ってくださった岩田康雄先生に感謝申し上げ、まとめの言葉に代えさせていただきたい。

伊藤智佳子さんの
＊「ピア・カウンセリング」についての考察にご意見をお持ちの方。
＊「女性障害者の抱える特有の課題」について一緒に考えてみようと思われる方。
ぜひ、ご連絡ください。
冨田（☎〇六・六六九一・一〇二八）



連載を終えて‥‥伊藤智佳子さん

★生まれてきて良かった

子どもの出産に立ち会うことは、私の理想だった。しかし、父親の立会いとは、白衣の人たちに囲まれて横たわる妻を、おそるおそる遠くから覗き見ることだと思い込んでいた。

ところが私たちの選んだ分娩室には、天井から垂れた布のロープや、変わった形のイスが用意されているくらいで、あとは、普通のベッドが一つあるだけだった。私は普段着のまま、イスに座った妻の背中を支え、「いつでもいいですよ」と穏やかに繰り返す若い助産婦の笑顔を見ていた。

こうして広い部屋に私は、妻と助産婦の三人で、静かで長い夜を過ごした。私は、ときおり強い眠気に揺らされながらも、その時間が特別な流れかたをしていることを感じていた。

「じゃあ、そろそろですね」と助産婦が言い、手にもった携帯電話をかけると助産院の院長がやってきた。そして妻が、ひとしきり泣くような大きな声をあげたら、息子よ、おまえが、隠れたドアの向こう側からスルリと現れ

るように生まれてきたのだ。

「ほうら、出てきたよ」と院長に言われて、おまえは妻の腕に抱かれる。「よく、がんばったねえ！」と妻は何度も何度もおまえに呼びかけていた。覚えておきなさい。それが、おまえの目に初めて映る母の最初の言葉だった。

私はハサミを渡され、太くて硬い膠（にかわ）のような臍の緒を切った。父は、このように母と息子のつながりを切るものかもしれないと、私は独り言のようにつぶやいた。

おまえの身体は院長の手でさっとひと拭きされると、布でくるまれ、「じゃあ、お父さん、しっかり抱いててね」と、私に手渡された。妻には胎盤の処理という仕事が残っていたからだ。

生まれたばかりの赤ん坊は大声で泣くものと思っていたのに、おまえは最初に少し泣いただけで、もう落ち着いていた。泣かない姿に心配になった私に、院長は「抱かれて安心しているんですよ」と笑った。

胎内から出て、まだ数分もたたないまま、静かに目覚めているおまえを、しばらく一人で抱くという特権は、こうして私に与えられた。たぶん胎内にいたときのように腕を宙に動かすおまえに、気がつけば私は考えることもなく、「生まれてきて良かったね」と繰り返し繰り返し唱えていた。

そうだ。いつまでも忘れないようにしなさい。私が父としておまえに最初に聞かせた言葉は「おまえは生まれてきて良かった」ということだ。この地はいまは平和だが、おまえが生きている間には争いの時代があるかもしれない。おまえは辛い病や境遇を経験するかもしれない。しかし、そんなときには父の言葉を思い出しなさい。

生まれたときには私が「生まれてきて良かった」と言ったが、おまえが生を終えるときには自分の口で「生まれてきて良かった」と言いなさい。また、そう言えるようにこれから生きていきなさい。良い人生は、たぶん、そのように始まるものだから。（知）

はあとが、はろー！
頒布価５００円（送料別）

感謝

カンパ、葉書、お菓子等のご寄贈等を、ありがとうございました。

稲垣恵雄、小嶺広倫、阪田富子、田村昌子、松本妙子、吉原和郎、その他の方々

植物あれこれ

第十四回

山口康二郎

――サクラ――＜その１＞

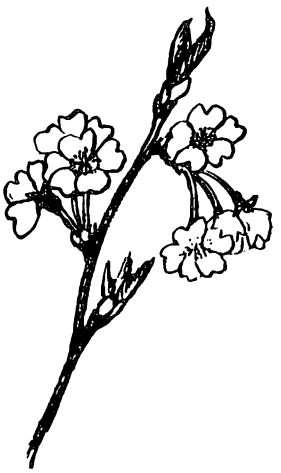
「年に一度、季節と人の期待を決して裏切ることなく、さくらは満身を花で飾る。さくらは、日本の自然のもっとも華麗な意思表示であり、正直な本音なのだと、いつも思う」

ある女性エッセイストの文ですが、サクラと日本人の関わりを非常によくとらえていると思います。

サクラがいつごろから日本に現れたかは定かではありませんが、日本最古の史書である『古事記』にその語源があるというところをみるとサクラは日本の花であるといえます。

太古から日本列島に住んできた私たちの祖先は、咲きほこるサクラの花と共に、春をたたえ、春を楽しんできました。現代の私たちが公園や社寺の境内などで楽しんでいるサクラは、ほとんどが染井吉野（そめいよしの）という品種です。

よく誤解されていますが、この名前は奈良県の吉野にちなんだものではなく、幕末の頃江戸の染井（そめい）（現在の豊島区駒込）の植木屋がエドヒガンとオオシマザクラの雑種



として広めたといわれ、明治になって全国に普及したものです。ちなみに吉野山のサクラはヤマザクラです。万葉集などにうたわれているサクラもヤマザクラです。

サクラの品種は江戸時代で、既に二五〇種を数えるまでになり、古代から今に至るまで日本で独自の発展をした国花ともされてきました。

サクラの花の短さを惜しむ心は、古今和歌集の紀友則（きのともので）の「ひさかたのひかりのどけき春の日に静心なく花の散るらむ」に見事にうたわれています。しかし、その落花の美学が幕末から第二次大戦には、武士や軍人精神のシンボルとしてもてはやされるサクラになって「散るべき時に清く散り、御国に薫れ桜花」とうたって、特攻に若い生命（いのち）を散らしていったのは、サクラにとって残念な歴史でありました。私の兄の最後の言葉は「日本男子山口康夫花と散る。撃て、撃て、撃て！…」であったと臨終に立ち会ってくださった友人からの手紙で知ったのは、私が九歳の時でした。

「サクラが花を咲かせ、風で花びらを散らしていくのは、ひたすら自然の理にかなったことであって、散らしてはならぬ生命（いのち）を散らしているのではない」

サクラは生命（いのち）の限りを生き、そして散り、人間が邪魔をしなければ千年も生きて、花を咲かし続けるいのちの泉なのです。

美智子のこんな話

岸田美智子

私らしい生活作りにご協力を・・・

私は、住吉区万代４丁目のマンションで一人暮らしをしている、24時間介助が必要な車椅子の女性障害者です。昼間、住吉区にある『自立生活センター・ＭＹ－ＤＯ～まいど～』で障害者のいろいろな生活に関する相談にのる仕事をしています。生活のあらゆる場面、例えば食事・トイレ・着替え・お風呂・夜の寝返り・・・などで介助がいります。

こんな私の地域での当り前な生活作りにご協力してくださる方はご連絡くだ～い！

＝介助が必要な曜日・時間帯＝

★泊まり介助

月・水・木・日（19時～翌日８時）５、６００円～

火・金・土（19時～翌日10時）６、６００円～

★昼間の介助

火・土・日（10時～19時）時給７００円

◆交通費は１０００円まで支給します。

◆２～３時間でもかまいません。

◆介助の経験のない方でも結構です。慣れた介助者が同行させていただきます。

＊女性の介助者に限ります

○連絡先＝自立生活センター・ＭＹ－ＤＯ～まいど～

大阪市住吉区長居西１－９－12（キミハウス１階）

TEL・FAX（06）６６０９－３１３３

岸田まで

お知らせ

＜サロン・あべの＞４月の出会い

日　時　…４月15日（土）午後１時～４時

場　所　…育徳コミュニティーセンター２階研修室（スロープ・車いすトイレ有り）

［阿倍野区阪南町５－15－28］

内　容　…ピア・カウンセリングについて

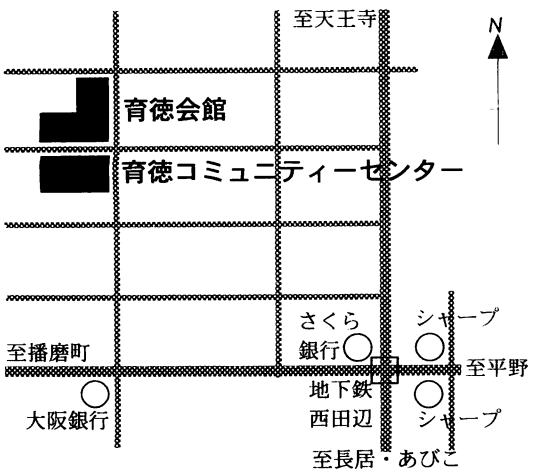
パネラー…大友章三氏

障害者自立生活援助センター・とよなか　代表

会　費　…なし

お問い合わせ先…

TEL06－６６９１－１０２８（冨田慶子）



晴れのち晴れ ⑱

稲垣　恵雄

大事なもの

今は亡き相田みつを氏は、ご生前、書はもとよりたくさんの詩を作っておられた。それで、相田氏が書と詩で独自の生活を切り開き、その作品は現代人の心のオアシスとして大きな反響を呼んでいる。

私も相田氏の詩が大好きだがその中でも次のような詩が特に心うたれた。

土の中の水道管
高いビルの下の下水
大事なものは
表てに出ない

私はこの詩を見て、ある高僧の「お前はまだ目立ちたいのか。目立つあいだは一人前じゃないぞ」と言われたことを、ふと思い出した。

お恥ずかしいことに私は未だに人の前では目立ちたくて仕方がありません。確かに人の前で目立つあいだは一人前ではないのかも知れません。

だからこそ相田氏が水道管や下水のように大切で必要なものは土の中や高いビルの下に隠れて目立たないのである、と言われている。要するに本当に立派な人、偉大な人は目立たないし、また表てに出ようとはされないということだろう。そういえば、私の身近にも立派な人、偉大な人がおられるが、少しでも見習いたい、と心ひそかに念じている。

朗読テープのご案内

朗読グループ「ぽけっと」のご協力で〈サロン・あべの〉紙一六四号の録音テープ（六〇分）が出来ました。

朗読テープ文庫

Ⅰ〈サロン・あべの〉紙は、第一号より一六四号までそろっています。（五〇号は九〇分と六〇分の二本のテープに、一〇〇号は一二〇分テープ二本）

Ⅱ〈サロン・あべの〉十周年記念誌「はーとが、はろー！」（九〇分テープ二本＋一二〇分テープに収録）

Ⅲ絵本「未知の記憶」（作・絵　中川勝彦）

Ⅳ「ラジオたんぱ」放送『〈サロン・あべの〉平成七年五月の出会い』放送分（三〇分）

Ⅴエッセー集「逃げた『ヨナ』～ボランティア活動の周辺～」（岡本栄一著＝糸でんわ音訳）

Ⅵ「キミたちだけじゃ困るんだ～身障者だけで旅した十余年～」（山田誠１９９５・２・２２著＝糸でんわ音訳）

Ⅶ「金子みすずへの旅」（島田陽子著・九〇分テープ二本＝糸でんわ音訳）

Ⅷ「夕やけ空のオニヤンマ」（牧口一二著・九〇分テープ四本＝糸でんわ音訳）

Ⅸ「ガベちゃん先生の自立宣言」（曽我部教子著・九〇分テープ五本＝糸でんわ音訳）

Ⅹ「セルフヘルプグループ」（岡知史著・九〇分テープ二本＋二〇分テープ＝糸でんわ音訳）

いずれもご希望の方には、ダビング、または貸し出しをしますので、冨田までお申し出ください。

（☎〇六・六六九一・一〇二八）

サロン隣組ニュース

■「サロン淀川」４月の出会い
日　　時：4月16日（日）午後1時30分～4時
場　　所：「やすらぎ」大阪市淀川区三国本町2-14-3
テーマ：始まりましたよ、介護保険制度
　　-知っておきたい介護保険のQ&A-
パネラー：川田　誠氏
　　はくあい介護サポートセンター
　　介護支援専門員（ケアマネジャー）
会　　費：なし
問い合わせ先：淀川区社協（ボランティア・ビューロー）
　　☎06-6394-2900

■「サロンつるみ」４月の出会い
日　　時：4月2日（日）午後1時30分～4時
場　　所：「大阪市立鶴見会館」
　　大阪市鶴見区横堤5-5-51
テーマ：聴覚障害を生きる
　　～Yes I can～
ゲスト：宇田二三子（うだふみこ）氏
　　大阪市中途失聴難聴者協会会長
会　　費：なし
問い合わせ先：鶴見区社協（ボランティア・ビューロー）
　　担当=藤井　☎06-6913-7070

■《てくてく・すみよし》３月の出会い
日　　時：3月19日（日）午前11時～午後2時
場　　所：大阪市立我孫子南中学校体育館
内　　容：「第2回ほっこりハート広場」に参加します。
　　第1部　＊ふれあい喫茶コーナー
　　＊ふれあいバザーコーナー
　　＊手作りコーナー
　　第2部　＊ほっこりコンサート
　　-歌って踊ってハートほっこり
　　からだポカポカ-
　　我孫子中学校ブラスバンド演奏
問い合わせ先：山本篤江　☎06-6692-8411

■「サロン『アイ』」４月の出会い
日　　時：4月8日（土）午後1時30分～4時
場　　所：「おかちやま」2階ボランティアルーム
　　大阪市生野区勝山北3-13-20
　　生野区在宅サービスセンター
　　☎06-6712-3101
内　　容：知的障害者の地域での暮らし
パネラー：良本雅美氏　　良本東子氏
会　　費：なし
問い合わせ先：生野区社協（ボランティア・ビューロー）
　　☎06-6712-3101

■「サロンいたみ」４月の出会い
日　　時：4月8日（日）午前1時～
場　　所：昆陽池（こやいけ）公園（伊丹市）
内　　容：お花見
会　　費：なし
問い合わせ先：西原（19時以降）
　　☎0727-79-4078

編集後記 FROM EDITOR

伊藤智佳子さんは当初、少しでも編集子の手間が省ければと、字詰・行間など本紙のスタイルに合わせて原稿作りをしていただいていたようです。また、連載が進むにつれ、読者の反応を気遣うおたずねも何度かいただきました。連載終了のお礼と合わせて、こうした陰の細かいお心遣いに感謝いたします。ありがとうございました。（石）

編集人；サロン・あべの運営委員会・＜サロン・あべの＞Vol.165［H.12. 3.18.発行］定価￥１００.
代　表；山村貴司〒546-0033 大阪市東住吉区南田辺５－１－１８　TEL０６-６６９１-９０７１
連絡先；冨田慶子〒545-0021 大阪市阿倍野区阪南町６－３－２６　TEL・FAX０６-６６９１-１０２８
表　題；井上憲一・筆　　文中イラスト；石田美禰子
郵便振替口座；サロン・あべの　００９５０－９－２６９４１
印　刷；セルフ社〒546-0044 大阪市東住吉区北田辺町4-23-2ミスターDビル2F TEL０６-６７１９-８２１２
発行人：関西障害者定期刊行物協会［大阪市城東区東中浜2-10-13 緑橋グリーンハイツ1F］

一九九一年九月三日第三種郵便物認可（毎日発行）